トルコ族と佛教

トルコ族で佛教を奉じたらうかと思はるゝ最も古いものは、漢代から支那に知られて居る康居である。後漢時代以後其の國の佛僧である康巨（或は康臣に作らる）康孟詳・康僧會・康僧鎧・康道和の如きが支那に來て、佛教の宣傳、經典の傳譯に從事したことは、梁の慧皎の高僧傳を始め、諸種の經錄にも記さるゝ有名な事實である。康居の民が如何なる人種であつたかについては諸說必ずしも一致しないが、自分はそのトルコ種であつたといふ說を信じて疑はない。後に南北朝時代から康國といふ名が、サマルカンド（Samarkand）を中心にしたソグディアナ（Sogdiana）地方を呼ぶ名稱として漢史に現はれ、而して隋書北史魏書などの西域傳に、「康國者康居之後也」と記して居るので、其の前身なる康居も康國同樣イラン種族の國であるといふ見解が、西洋の東洋學者の間に行はれて居るけれども贊成し難い。尤も自分は此の兩個の名稱の間には相關する所があるだろうと思ふし、また南北朝以後康國と稱せらる地が、曾て康居の領する所であつたらうとも考へるから、「康國者康居之後也」の記事を、必しも何等根據なき一時の思付きとのみ見るものではないが、併し漢代の史書に見ゆる康居の記事を熟讀して、其の生活狀態や言語などを考察すると、當時ソグディアナ地方に據つて所謂イラン文化の所有者であつた人民との間には著しい相違があつて、到底之をイラン種族とは考へ難い。